〈一 冊 の 本〉

『アジアを抱く
―画家と人生　記憶と夢』

富山妙子（とみやまたえこ）著

岩波書店　2009年　2900円（税別）

今年の夏休みに１か月間、大連、瀋陽、長春、西安、北京を訪れ、史跡や歴史博物館を見学して来たので、少女時代を旧満州で過ごされた著者の自叙伝を、読む気になった。

2009年10月３日に亡くなった元財務・金融担当相の中川昭一氏の新聞記事に載っていた、父・中川一郎氏が自殺されたときの夫人の、男は弱い、との言葉は、小生には印象に残っていたが、今ここに紹介する本書の読後感は、女性は強い、であった。富山妙子氏は二度離婚し、二人の子供を育て、88歳の今日でも現役の画家として活躍しておられる。その前へ前へと進んで行かれるエネルギーには、とても感心した。

目次は次のようになっている。

初めに――原風景から
第１章　若い日　満州から戦時下の日本へ
第２章　敗戦　画家として生きる
第３章　時代の迷路　ラテンアメリカ、そして第三世界との出会い
第４章　凍ったソウルの春　韓国民主化運動とともに
　１．1970年　韓国で
　２．韓国と日本　光と影
　３．女からの問い
　４．金芝河の詩とともに
　５．光州の光と闇
第５章　戦争の深い傷跡　アジアを抱いて
　１．巫女と死霊
　２．慰安婦に捧げる献花
　３．1988年　天皇の逝く年に
　４．タイ　帰らぬ少女たち
第６章　わがこころのマンチュリア
あとがき

神戸で生まれた著者は、父の転職で大連の嶺前小学校、大連弥生女学校ですごし、ハルビン女学校の第１回卒業生である。ハルビン女学校には満人も朝鮮人も入学できたが、朝鮮人生徒は創氏改名の必要があった。李恩秀さんは奉天からの転校生であったが、「奉天の両親が来るまで待って下さい」と言って朝鮮人姓を押し通した。彼女は、朝鮮服で登校するときもあり、先生が注意すると、「制服は洗濯屋に出しました」と答えた（28頁）。その李さんと、著者は1970年に韓国を訪れたとき、再会した。ソウルのホテルから同窓会名簿を頼りに李さんに電話を入れ、翌日、５人の同期生と再会した。５人のうち４人の夫は、終戦、朝鮮戦争等をへて生死不明であった（143頁以下）。彼女たちが語り合った戦争の悲しみの文章には、胸を打たれる。著者はこのような人生の中での苦しみ、悲しみを、きれいな文章で、淡々と描いている。

画家として激動の時代をしぶとく生きて来られた一人の女性の、反戦・平和のための強靱な信念は、読む者にじわりじわりと伝わってくる。福祉施設の中で悪戦苦闘しておられる女性の方々に、一読を勧める文献である。

（本研究所研究員　篠塚敏生　西洋史）